

# 龍谷大学 農学部 食料システム学科の活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.7



## 毎年続いている柿祭りの裏方役

2015年に農学部が新設された龍谷大学瀬田キャンパス。農業者が多い滋賀県だけに、住民からの期待も大きいという。農学部4学科のうち食料農業システム学科では、「食」と「農」を支える地域と経済の仕組みを学ぶ。中でも、山口道利准教授の研究室では、生産現場から流通・消費に至るまでのフードシステム全体を対象として研究を進めてきた。学生たちは、生産・流通・販売・消費の一連の流れ「フードシステム」の中から、課題を見つけ出し、学んでいる。この大きな流れが、地域だけで完結しているものを「ローカルブランド」と呼んでいる。滋賀県内のローカルブランドのひとつ「今津の柿」の産地、深清水より「研究フィールドにどうですか？」とお声がかかったのをきっかけに、2018年、地域連携の取り組みが動き出した。

山口先生の研究室にお邪魔すると、一際目に付く緑ののぼりがある。メガネをかけた柿のイラストが描かれていて、なんだか愛着が湧く。「学生たちがデザインしたんですよ」と微笑む先生。おそらく先生の顔と深清水の柿をコラボしたのである。メガネを掛けた柿のゆるキャラに、学生たちと先生との心の近さが窺える。連携をはじめた年にスタートした「秋の柿祭り」を皮切りに、地域に入り込み、学生たちはイベントの裏方として、ポスター作成や厨房作業を担当した。当日も地域の方々と交流し、楽しんだ。普段、交流することがない、地域活性化に奮闘する大人たちに良い刺激を受けたそうだ。柿祭りはこれをきっかけに毎年開催される定例イベントとなっている。

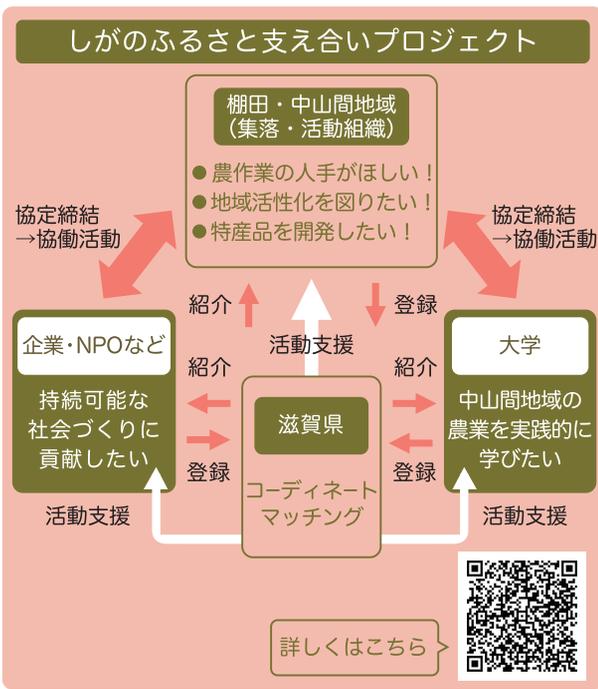


龍谷大学 農学部  
食料農業システム学科

准教授 山口 道利 氏

新しく確立される  
ローカルブランドを学ぶ

現在、柿だけでなく、オリーブの産地化も目指している深清水オリーブ産地協議会。2020年に協議会と龍谷大学農学部食料農業システム学科は「しがのふるさと支え合いプロジェクト」の協定を締結した。これから新しくつくるローカルブランドに関わるのはまたとない機会だ。オリーブの植樹作業から関わり、これからのブランドづくりを一緒に進めている。オリーブが成長し、実が収穫されるまで数年かかることから、現在はオリーブの葉を活用し、学生ならではの発想でアイデア出しをしているそうだ。今後は、柿も含めた商品開発をし、パッケージのデザインまで行う予定。深清水での取り組みを卒論のテーマとして扱う学生も出てきたそうで、地域とより深く関わっている。ローカルブランドの仕組みだけではなく、その地域に住む方の「想い」という本質的なことに触れる体験となっているようで、その縁を大事に活動に励んでもらいたい。





たかしましみなみふかしみず

# 高島市南深清水の紹介

【アクセス】湖西バイパス深清水ランプから0分、JR 湖西線近江中庄駅より徒歩20分



南深清水



▶柿畑の中に点在するオリーブ園

**高島深清水オリーブ産地協議会**

「高島市は湖と山の両方に近く、四季とともに移ろう雄大な自然が身近に感じられる。」という話をたびたび耳にするが、深清水はまさにそのような地である。スキー場を有する箱館山から、田園や家々の広がる扇状地を抜け、目前に竹生島が浮かぶ青々とした琵琶湖まで、豊富な湧き水が一気に駆け下りる。その中心に位置する田園地帯は、大正時代から続く今津柿の産地である。県内で生産される柿の6割が今津の柿だと言われている。しかし、この産地でも少しずつ高齢化が進んでいる。そこで柿に続く産品で産地化を目指そうとしている人たちがいる。それがオリーブというわけだ。2018年に結成された「高島深清水オリーブ産地協議会」(以下協議会)だ。

オリーブといえば、地中海、日本では小豆島や瀬戸内海など気候温暖の土地イメージがある。冬は寒く、積雪量も多い深清水で大丈夫なんだろうか？雪が残る1月、協議会代表の桂田隆司さんにお話を伺い向かった。



「深清水オリーブ産地協議会」代表 桂田 隆司 氏

## 地域のオリーブ産地のパイオニア

オリーブには3つの長所があるという。1つ目はポリフェノールを多く含み、健康に良いこと。2つ目はシカやサル、カラスなどの獣害に強いこと。3つ目は栽培管理に手間がかからないこと。獣害が多く、高齢化が進む地域にピッタリの作物である。温暖な地域だけでなく、国内の寒い地域でも産地があるという。

桂田さん達が幾度もこれらの先進地に足を運び、深清水に念願の植樹をしたのが2018年だ。協議会は、南深清水F.F.倶楽部、滋賀県、高島市、JA今津町の4団体で発足した。また、これがきっかけとなり、市内の他エリアでも展開し、産地化しようとする動きも始めた。市全体では、令和6年度までに1500本(5ha)の植樹を目指しており、桂田さん達も、今年はさらに今の倍以上、160本の植樹を予定している。

桂田さんは南深清水F.F.倶楽部という団体の代表でもある。「FF」とは将来のための意である「Future」を略して作られた。深清水に広がる空を見て、「この地を健康づくりの里にする」「楽しみながら健康しながら、地域の人たちも、深清水を訪れる人たちも、みんなが元気で健康になれる地域づくりを目指している。オリーブを初めて深清水に移樹してから4年がたった。来年からいよいよ本格的な収穫を迎える。同時に少しずつ賛同者やメンバーが増えて取組が広がっている。オリーブ栽培については事あるごとに、他産地と情報交換しながら生産を進めているそうだ。自分たちは素人なんです」と笑いながら桂田さんは話す。確かに全国的にみればそうかもしれないが、高島市や滋賀県のオリーブの生産を牽引するパイオニアだ。



▶高島ロングライド 100でのオリーブ茶提供

## 行動力で繋がる縁

深清水と龍谷大学農学部食料農業システム学科の山口ゼミとの取り組みは2017年からスタートした。桂田さんは龍谷大学出身で、滋賀県内に農学部が新設されたとき、何かの縁だとピンときて、アプローチされたそうだ。それが山口ゼミとの繋がりができた理由だ。オリーブ栽培もそうだが、新しいことに対する挑戦を常に続けている行動力に頭が下がる。「学生たちには、(深清水での活動が)自分のやりたいことが見つかるキッカケになってくれたら嬉しい」と話していた。深清水の自然の中での経験、新しいことにどんどんチャレンジする協議会メンバーの姿勢から明るい未来を見つけてほしい。次は協働してオリーブ商品を開発する予定である。



▶学生がデザインしたPR資料



お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号  
TEL: 077-528-3963

詳しくはこちら



# 成安造形大学の活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

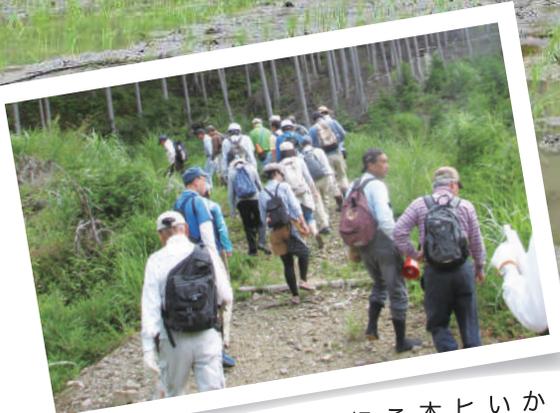
vol.5

成安造形大学は、大津市に位置する芸術大学。文化芸術を学ぶために6つの研究領域、19の専門コースを設け、滋賀らしさも学ぶことができる。  
 その中で地域づくりに特化した「地域実践領域」で研究・指導をする加藤賢治准教授にお話を伺った。

## 自然に囲まれた大学生活

地域実践領域がスタートしたのは2018年。2021年現在3回生が一番上の学年となっている。学生たちが本格的に地域を学ぶ新しい研究領域だが、加藤先生が地域に関わりはじめてからは15年になる。宗教民俗学や日本文化史を中心に研究してきた加藤先生が、滋賀の集落の祭事や行事に関わるようになって、そのロマンチックな魅力に気がついた。「成安造形大学に来るまでは、京都の高校で日本史を教えていました。当時は、歴史の中心は京都だと思っていました。」と苦笑いしていた。

滋賀独自の文化に魅了された加藤先生は今ではどっぴり滋賀にはまっている。滋賀の魅力に気づくきっかけは第3代学長の木村先生の一言だった。「古いもので今に残されたものは必ず意味があるし、ヒントはそこに隠れている」。農村地域に物事の本質があり、価値創造のきっかけとなるということ、成安造形大学が滋賀の自然に囲まれた場所に位置することに、深くうなずいたそうだ。実際に学生たちが地域に足を運ぶのは、「近江里山フィールドワーク」という年6回の授業。地域住民や地域活動をしている人の話を聞き取りしたり、ある時は農作業を手伝ったり、またある時は山にも入る。地域や自然の中に入っていく感触、楽しさ、爽快感、大変さなども全部含めて体験できるというのが魅力の授業だ。

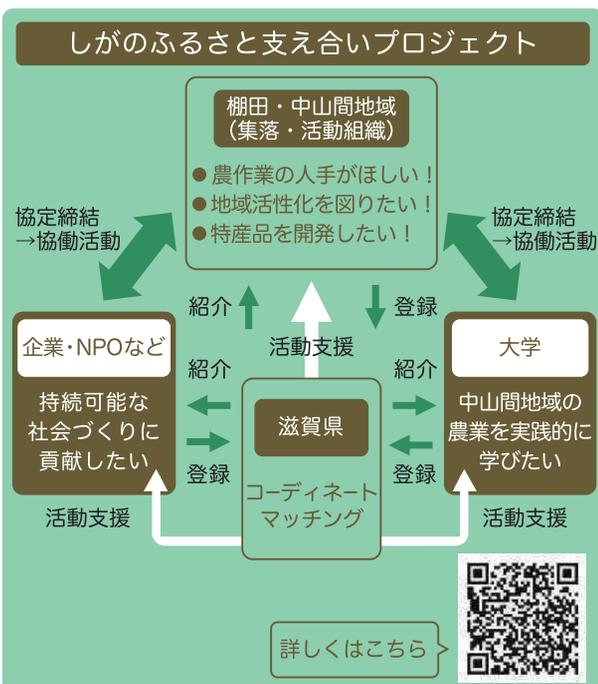


## 仰木地区は大学のキャンパス

以前から関わりのあった上仰木集落の仰木自然文化庭園構想八王寺組と、2019年しがのふるさと支え合いプロジェクトで連携協定を結んだ。加藤先生は「これからもお世話になりたい。仰木を大学のキャンパスと言えくらいい学生に関わりをもってもらいたい。(学生の)これからの生き方を仰木で学んでもらいたい。」と熱く語った。協定を結んだことで、より一層絆が深まっているようだ。さらに、加藤先生は学生たちに想いを込めて接している。「この授業をきっかけに、これからの社会に必要な価値、すなわち循環型の暮らしのあり方を理解し、そのうえで集落に入り、いずれは定住してほしい。」そう遠くない将来に、先生の想いは叶うだろう。



「成安造形大学」  
 准教授  
 加藤 賢治 氏





# 仰木自然文化庭園構想

はっちよじぐみ

## 八王寺組の紹介



上仰木



▶ 棚田と琵琶湖を望む

日本最古級 1200年の歴史をもつ棚田

上仰木地区は大津市を代表する棚田を有する地域。比叡山の麓に広がるその棚田は、1200年も前の平安時代前期から民の力で耕作されてきた。とても長い歴史をもつ棚田である。山からの水を引きやすいよう民家よりも高い位置に棚田を築き、比叡山の僧侶たちのために米作りをしていたという。全国各地の棚田は山に囲まれている地域が多いが、上仰木の棚田からは琵琶湖から鈴鹿山脈そして伊吹山まで臨むことができ雄大な見晴らしが特徴だ。圃場整備されていない昔のままの田んぼも40ha残っている。この棚田を起点に地域活性化を目指す「仰木自然文化庭園構想八王寺組（以下八王寺組）」の上坂雅彦会長にお話を伺った。

強い使命感、そして若手を巻き込む八王子組

八王寺組が発足したのは2007年。未来の上仰木を見据えて、活動の幅を広げ、かつ小回りのきくようにつくられた組織。棚田オーナー制度のオーナーになると、田植えから稲刈りまでの農作業が体験でき、新米がもらえる。オーナーは自然体験ができ、地域には棚田を守る人手が集まるwin-winの良い取り組みだ。

発足当初、地域外から知らない人が来ることに不安な住民もいたが、10年以上活動が続いている今では理解が進んだ。「こんにちは！」と天気がいい日には明るいオーナーの声や響くのが当たり前。お弁当をもった家族が棚田の様子を見にくることもしばしば。上仰木を第二の故郷として思っている方も多いようだ。

現在八王寺組ではトータル35haの棚田を管理している。20人の構成員のほとんどが兼業農家で、休みの合間を縫って作業を行っている。棚田はその美しさと表裏一体で管理は過酷な重労働である。上坂さんは「1200年前からの歴史ある棚田を朽ち果てさせたくない」と重労働も何のその、力強く話してくれた。その使命感からか、八王寺組を次世代に繋ぐちょっとした工夫がある。上仰木農業組合や自治会と連携して、若手を巻き込んでいくのだ。棚田の魅力や重要性を伝えるだけでなく、地域の仲間で農業をする楽しさを通じて、地域に誇りを持つ若者が増えていくという。八王寺組が10年続いてきた秘訣がそこにはあった。



「仰木自然文化庭園構想八王寺組」

会長 上坂 雅彦 氏



▶ 成安造形大学との連携



▶ 薬師堂

ライスセンターをつくり、上仰木棚田米ブランドを！

自然の湧水で育つ上仰木のお米は、美味しいと評判だ。棚田オーナーのリピート率も高く、毎年食べたいから参加しているというオーナーがたくさんいる。ぜひ一度食べてみたいと思うが、現状では一般には流通していない。いまは上仰木集落にはライスセンターがなく、棚田では各農家の自家用米として、家族や親戚などが食べる分だけを作っている。つまり、現在はオーナーにならなければ食べられないという幻の棚田米。しかし今後は「上仰木棚田米」というブランドをつくりたいと願っている。さらに上坂さんが思い描くのはただの棚田米ブランドではない。田んぼ一枚ごとに収穫を行い、それぞれの米の品評を行いたいと思っているそうだ。棚田が小さく、たくさんあるからこそできる八王寺組独自の発想に感心させられた。現在連携協定を結んでいる成安造形大学と、米袋のデザインや販売ルートについて検討している。

お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課

地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号  
TEL: 077-528-3963

詳しくはこちら







# 沖島町 離島振興推進協議会の紹介



海なし県に有人離島!?

近江八幡市にある「沖島」は淡水湖に浮かぶ日本唯一の有人離島だ。離島と聞くと遠いイメージを思い浮かべる方も多い。一度行ってみたいわかったが、近江八幡駅からバスで約30分の堀切港から乗合船で約10分とアクセスが良い。それもそのはず、琵琶湖の東岸より1.5kmほどの距離。車を使わなくてもすぐ行ける離島ということだけあって、近年観光スポットとしても注目を集めているようだ。

沖島では、平成25年7月、離島振興法の対策地域として離島に認定され、沖島町離島振興推進協議会(以下、協議会)が発足。それをきっかけに、島は大きく動き出した。島で暮らす協議会事務局、富田さんと小川さんにお話を伺った。



## 「普通の主婦」が島を変えた

協議会発足当初は男性が主体に活動していたが、1年が経った頃、女性の声も聞こえるようになった。現事務局の主婦3人が関わるようになった。

3人とも島の外から来たお嫁さん。だからこそ見えた島の良さがあるという。

「なにもしなければ島の良さが廃れる」と日頃から危機感を感じていたそうだ。なんとかしたい気持ちから、地域の方やアドバイザーの力を借りて、試行錯誤を重ねた末、沖島ファンクラブ「もんで」を設立した。「もんで」とは沖島の方言である。「帰って」「戻って」という意味だが、遊びに来てという想いで考えた。

それに加えて、沖島の野菜を中心とした弁当「もんでくって沖島めし」や、島民ガイド付きの遊覧船「もんでクルーズ」そして「沖島ファンクラブもんで」と3つの事業が協議会の活動の柱になっている。

どれも沖島の特徴や魅力を活かしており、ノリのいいネーミング力とSNS発信などによって、島を訪れる若い方もずいぶん増えたという。「ただの主婦」と自分たちを謙遜する彼女たちが島のあり方を変え、沖島にファンがたくさんきたのだ。



「沖島町離島振興推進協議会」

右 富田 雅美 氏

左 小川 文子 氏



▶さんしょうを栽培する畑



▶学生たちによる神輿担ぎ

## お土産品を作りた

沖島には佐儀長(さぎちよう)祭りという独特の元服行事をはじめ、春祭り、秋祭りなど、五穀豊穡や無病息災を込めた行事がたくさんある。それらの伝統行事の中でも、神輿を担ぐための人手が足りなくなったことから島外からの力を借りるようになったものもある。

今回、「しがのふるさと支え合いプロジェクト」で協定を結んだ滋賀県立大学「近江楽座座・沖島」とは5年ほど前から協働活動を進めてきた。座・沖島のメンバーたちは行事の参加やお手伝いはもちろん、地域の状況をヒヤリングし、島の活性化に取り組んでいる。

現在、沖島にはお土産になるような商品が少なくない。せっかく観光でこられる方の商機を逃すもったいない状況だという。これから滋賀県立大学と一緒に、島の資源を活用した商品開発を進めていくそうだ。どんな特産品ができるのだろうか。期待に胸が膨らむ。

お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課

地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号  
TEL: 077-528-3963

詳しくはこちら



# 滋賀県立大学 近江楽座

まんのぶのちやれんちゃー

## 政所茶レン茶ーの活動

しがのふるさと支え合いプロジェクト事例報告

vol.8



滋賀県立大学  
近江楽座「政所茶レン茶ー」  
代表 大原 悠人 氏

滋賀県立大学には、学生の主体的な地域貢献活動を支援する教育プログラム「近江楽座」がある。近江楽座が始まったのは2003年。滋賀県内を中心に各地域で実践的に取り組んできた活動は、実に35プロジェクト。今では学生が地域をフィールドに活動することが当たり前になった歴史ある取り組みだ。中でも「政所茶レン茶ー（ちやれんちゃー）」の取り組みは2013年から毎年続いており、地域にインパクトを与えている。

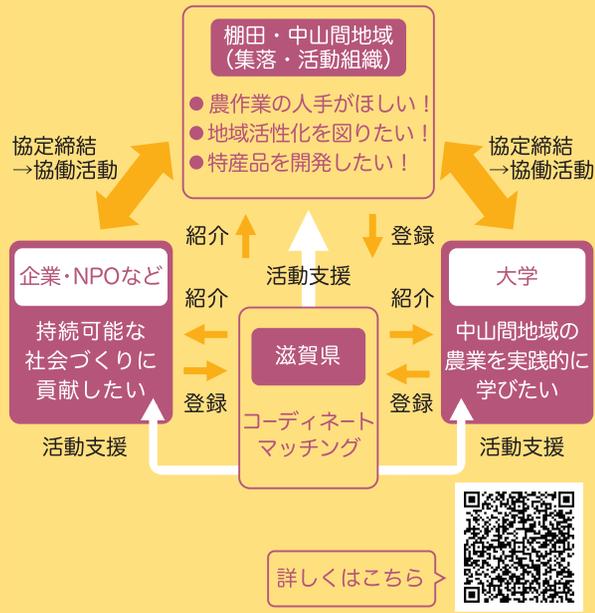
### 自ら生産し、広報活動に努め、地域を売り込む

「本来なら、今年は政所に住む予定だったんですよ。」そう語るの、代表の大原さん。コロナの影響で実現しなかったが、それだけ真剣に地域と向き合っていて、地域にもっと馴染みたいという気持ちの現れなのだろう。最初は先輩に誘われてなんとなく加わったと笑うが、今ではメンバー35人を率いているリーダーだ。穏やかな話し方のリーダーに、どこか安心感を抱いた。きっと、メンバーもそう感じて大原さんについて行っているのだろう。彼らの活動の驚くべきところは、政所町に自分たちの茶畑を持っていることだ。借りている畑ではあるが、日常の畑作業は地元任せず、すべて自分たちで行っている。2019年度には、地域の生産者団体、「政所茶生産振興会」としがのふるさと支え合いプロジェクトとの協定を締結し、より長期的な目線で政所茶の生産や振興に向けた活動を展開しようとしている。しかし、今年度はコロナウイルスの影響で、思い通りに対面販売ができず、試行錯誤の一年だったそう。YouTubeにお茶の楽しみ方の動画をUPしたり、インターネット販売を始めたたりしたりと、対面以外の広報にも踏み出している。

### 地域活動を継続する秘訣は、いかに自分たちが楽しむか

後輩たちに茶畑の管理だけは続けてほしいと大原さんは語る。かと言って、茶レン茶ーの活動は単位になるわけでもなく、お金になるわけでもない。結成してもうすぐ10年になるということもあり、活動をどう後輩たちに引き継いでいくかということに課題を感じているようだ。地域活動の継続にあたっては、「モチベーションの維持」という共通の難題がある。大原さんが後輩たちに伝えていることは、「とにかく楽しんで活動すること。」そう話す大原さんは楽しそうだった。楽しいところには、つい人が集まるのが常である。いかに自分たちが楽しむか。それが重要なのだ。彼らなりに、地域と交わる本質をしっかりと捕まえて、後輩に繋いでいっているのだと感心した。うまくやらなくていい。活動を続けていくことが、地域の人たちとの約束であり、見えない絆なのである。

### しがのふるさと支え合いプロジェクト





# 政所茶生産振興会の紹介



「宇治は茶どころ、茶は政所」と茶摘み歌に詠われる「政所茶(まんどころちゃ)」の産地、東近江市奥永源寺地域は、市街地である八日市から約30km離れた山里に位置する。臨済宗永源寺派大本山の永源寺を過ぎて、永源寺ダムも越した先の山村に広がる政所の茶畑は、美しい日本茶の原風景と言われている。深呼吸したくなるほど美味しい空気が思わず笑みを溢れさせる。体の中を新鮮な空気に入れ替え、本日の取材先である政所茶生産振興会(以下振興会)の山形さんに会いに行った。



「政所茶生産振興会」  
茶縁むすび  
山形 蓮 氏  
理事

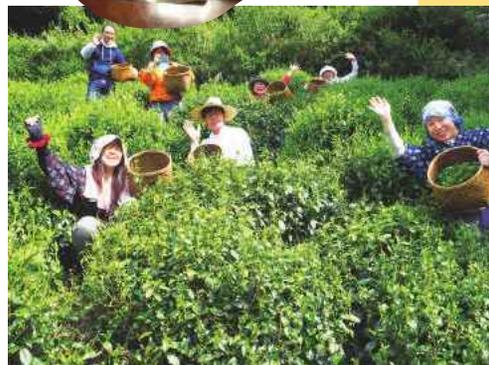
## 生産者たちをひとつに。振興会の発足

着いた途端「ハーブティー飲む？」と山形さんからの嬉しいお誘いが。聞けば、新しいお茶の楽しみ方を提案するために、試作していた。日本茶でハーブティーとはまさかの驚きである。600年の歴史を持つ政所茶で西洋流の楽しみ方ができるとは誰が思いつくであろうか。生産者であり、移住者であり、アイデア豊かな山形さん自らの考案であることに納得。そして、意外とハーブに合う…という大変失礼だが、味も良い。ハーブティーへの可能性も感じる政所茶を楽しみながら、振興会のお話を聞いた。

現在、政所茶の生産者は70歳代以上が大半。このままでは60年の歴史が途絶えてしまうかもしれないという危機に直面しているようだ。次世代を担う60歳以下の生産者たちが危機感を持ち、これからの産地をどうしていくのかと、2016年に勉強会がスタートした。改めて、産地内の現状や生産方法を学んだり、他産地を勉強したりと、兼業農家でもある彼らは仕事の合間を縫って勉強会を重ねてきた。そして、その半年後、勉強会のメンバーが発起人となり、2017年に振興会が発足した。2021年現在64人が所属し、振興会は生産者のみで構成されている。振興会ができたことにより、今まで組織がなかった政所茶の生産者たちがひとつになったと言える。行政やJAなどからの情報も入りやすくなり、支援も受けやすくなった。



▶山形さんが手掛けた政所茶



## 外の力を借りながら、昔から受け継がれた価値観を守る

昔ながらの自然によりそった考え方、これが政所茶が大切にしている価値観であり、伝統である。お茶の木は、老木になると反収が落ちるため、一般的に40〜50年ほどで植え替えられる。しかし、政所の茶樹は在来種を中心に樹齢30年以上のものもあり、まだまだ現役を果たしている。角のついたマイルドな味は、政所茶の優れた特徴の一つであるが、それは若い木では出ないそうである。また、自然由来の肥料のみを使い、一番茶の収穫も手摘みを未だに行っている生産者もいる。手間かけた丁寧な栽培方法は、今こそ世界が意識し始めたSDGsの取り組みそのもの。住民たちは、兼業農家として、歴史を守ってきたのである。今では、農家の数も減ってしまったため、茶摘みの時期には、政所茶の歴史を支えたい志のある人たちがたくさん訪れる。中でも政所茶レン、茶一は特別で、自分たちの茶畑を持ち、自分たちで管理も行う。「外部の若者たちを受け入れることで地域の意識も徐々に変わったのでは」と語る山形さんは、嬉しそうな笑みを浮かべた。実は山形さんは元政所茶レン、茶一で立ち上げメンバーでもある。自分が立ち上げた学生団体が世代が変わった今でも続き、地域貢献をしているのは嬉しいに違いないだろう。

お問い合わせ先

滋賀県農政水産部農村振興課 地域資源活用推進室

〒520-8577 滋賀県大津市京町4丁目1番1号  
TEL: 077-528-3963

詳しくはこちら

